

アイ 教えて

ばっしゃー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

二一二〇年。世界は人で溢れかえっていた。人口増加は留まることを知らず最早「地球ではなくなりつつあった。国を存続させるため政府は禁忌を犯すこととなる、「計画的人口削減策」の施行。奴隸法案により狂った世界で男は何を見つけるのか。

一.

膨れる

目

次

## 一・ 膨れる

二一二〇年。世界は人で溢れかえっていた。家から一度外に出ようものなら秒で十人は視界に入れることになる。マンションは最低二〇階建以上でなければ建設案も通らない。建設基準法が何度も改定されたかも分からない。それもそのはず現在の日本人口は四・六億人。世界人口に至っては二四〇億人を突破した。この事態により食料やその他物資の不足が深刻化してきており、その証拠にコンビニやスーパーマーケットの商品棚は常にがらんどうの状態である。

人で溢れかえる現代、人々は人間の収容及び減少方法に至難の色を示していた。

つい一世紀前まで日本では少子化が、海外では人権が騒がれていた。しかしそうも言わなくて良い、と同時に言つてもいられない現実が目の前にある。政府はこの事態を重く受け止め、過去に中国で施行されていたようなものを初めとした様々な政策を打ち出してきた。しかしその効果はあまり見られず人口は右肩上がりに上昇していった。そして遂には禁忌を犯し始めた。

二五年前の二〇九五年、政府は「人身売買」を許可する法案を可決にした。正確には「計画的的人口削減策」という名前のその規則の内容は数個の項目に分けられているが、主なものは人を商品のように売買しても罰則は無いと言つた内容のものであつた。

百年やそこらで倫理観を捨てきれなかつた政府の偉い方々は「殺す」といつた直接的な文言を法案には記せなかつたらしい。そこで「人身売買」という形に落ち着いた、商品ならば壊してしまつても問題は無いのだから。

しかし売買する人間は誰でも良い訳では無く、一定の条件に当てはまつた者でなくてはならない。

第一に女性である事。人口が増える一番の原因は出産である為。第二にその中でも閉経している者は除く事。理由は前述の通り。

第三にその中でも公務員及び国に申請を行い受諾された者は除く事。国を発展、回す手腕を持つ者は失いたくは無い為。

以上の三点をクリアした者は不幸にも晴れて物になつてしまふ可能性を孕む。

しかしこの法案のおかげで栄えた業種もある、塾が良い例だ。公務員になつてしまえば我が娘を人身売買せずに済む、そう考えた娘を持つ親はこそつて塾に通わせる。その為現在ではコンビニより塾の数の方が多いほどだ。

また医療の分野も今まで以上に栄えている。卵巣摘出を行えば妊娠はしない為である、しかしこちらに連れ込む親は塾に比べるとあまり多くは無い。高価な事もあるが、何よりやはり親は孫の顔が見たいらしい、だが卵巣摘出を行つても女性であれば里親になることは出来る。これで親は孫の顔を拝め、娘は後世に自身の「何か」を残せる。「何か、つてなんだよ、何かって。」

テレビから聞こえてくるコメントーターの解説に突つ込む男の声。普段は無個性なツンツン頭をしているが現在は寝起きの為ぼさぼさ。ばさばさと右手で寝癖を直そうと無駄な努力をし、空いた手で掴んでいるぱさぱさの食パンを口内に押しやっているこの男は、

佐伯竜堂、二十七才。

「血も繋がっていない、ルーツも分からない、性別は一種類。そんな限定的な条件下で選出された何処の馬の骨とも知らないガキに『何か』を託せる親なんているのかねえ。」

言い終えコーヒーでパンを流し込む、と刹那えづく竜堂。何度か咳払いをし落ち着いた後で、その怒りをぶつけるかのようにテレビのコメントーターを睨み

「大体そのガキどもは生まれて直ぐに売られ、そこから誰かに買われるまで外との交流は一切無いんだぞ。そんな奴らが見ず知らずの奴とコミュニケーションを取つて家族の一員として溶け込むと思つてるのか!?」

少々エキサイトし過ぎた為か心臓の鼓動が早い、ふう・・・と一拍置き

「出生後すぐに売られたガキは教育を全く受けないんだぞ！話せず読み書きも出来ない。意思の疎通が不可能なんだよ！んで基本的に売

られるガキは出生後間もなく売られる、売値が高いからなあ！

加えて出生後間もないガキの買値は異常だ、両親とともに公務員だとしても恐らくは手が出ない値段なんだ。赤ん坊の里親になることはまず不可能。てことはだ・・・お前の言つてることは机上の空論だ！」

と言うや否や異議があるのかはたまた犯人でも見つけたのか、ビシツとテレビの方向を指さす。余韻に浸る事数秒、それで満足でもしたのか何事も無かつたかのように朝食に戻つていく竜堂。現在は朝の七時である。

朝食を済ませた後、歯を磨き身だしなみを整え通勤鞄を用意する。現在は朝の七時五十分。職場の始業時間は八時三十分。竜堂の家からは近いこともありいつも八時に家を出ているのだが・・・  
「もう・・・。この中途半端な時間がわしや嫌いじや。コンシュマーゲームをするには短く携帯ゲームで潰すには長い。」

時間に対して愚痴り始めた、が言つても時間は一定間隔でしか進まない。渋々といった感じで携帯端末を取り出しSNSを見始めた。人の雑多なものから専門的な感想まで、更に即座に更新されていくニュース、と雑に情報を集めたい時には重宝するSNS。朝のこういった隙間時間にそれを除くことが竜堂の日課になつていた。

「あてにならない書き込みの方が多いんだけどねえ。まあ、暇つぶしにはもつてこいなんだなあ。」

誰に語りかける訳もなく発される独り言。

携帯端末に添えられた親指は忙しなく下へ、下へと動き新たな情報を竜堂へと伝える手助けを行う。

「ん？」

気になる書き込みを見かけた、内容は「ジンブツが施設から逃げた」といった旨のもの。検索ワードを絞つて検索をかけてみる。写し出される結果を見て一言

「あちゃー、bingoかー。まあ処理班が何とかしてくれるでしょ。」やつてしまつたと言つた感じではあるが竜堂は飄々としている。

むしろ彼の関心は既にその内容では無くある言葉に向けられていた。

—ジンブツ— この字面を見る度に変な気分になる。人であつたが現在は物である、故に人物＝ジンブツ。売られた者達の総称だ。自分と彼ら彼女らは何も変わらない、機能も染色体の数も。なのに、実体のない決まり事一つのせいで雲泥の差だ。自分は人間で奴らはジンブツ……。悲しいとは少し違う、きっと残念と言う表現が一番当てはまる。それだけではないどこか引つかかる部分もあるが、大元の理由は恐らくそんな気持ちにさせられるからだろう、この言葉に嫌悪感を抱き続いている。きっと昔からずっと。

「まあ、しゃーないよね。」思考に蓋をする為にため息を一つ。  
「ぼちぼち行きますか。」

朝の満員電車は辛い、昔もそうだったらしいが今の方が遙かに辛いだろうと竜堂には思えて仕方がない。まず駅のホームが複雑だ。人口が増えてきた為に同じ路線、回りでも乗り場が分かれている、それも階層ごとに。簡単に言えば地上路線の上、地下にそれぞれ同じ区間の路線を作ったのだ。場所によつては地上四階地下二階といった所まであるほどだ。しかしそれだけの路線、乗り場を作つたにもかかわらず乗車率は驚異の一五〇%。正に世も末である。

幸いにして待機列の先頭を取れた竜堂、片手に持つ携帯端末に表示されるは先ほど見かけたあのトピック。家を出てこのホームにたどり着くまでずっと検索を続けていた。

「しかしこれは、今日はウチも大変だろうなあ。」

はあ・・・とまたもやため息。朝の頭の冴えていない状態で体内から空気を排出すれば、身体は酸素を欲しがるもの。ため息をしたその流れであくびへと移行した竜堂、しかしそのあくびは周りから聞こえてきたある会話に遮られる。

「見た？ジンブツがまた脱走したんだって」

「見た見た。もう今月で何回目だよつて話。先月だつて」

「だよなう。ちゃんと管理しろつての、御宅らの商品だらうがよお」「でも、もしあわよくば拾えたらラッキーだよなう。毎日がハッ

ピードラうな」

「お前どんだけ溜まつてんだよ。んなら買えれば良いじやねえか」

「馬鹿お前、高えんだぞ、アレって」

と話すは男子学生二人。様相からして高校生だろうか。

竜堂のあぐびが止まつたのはなにも今見ていたトピックと聞こえてきた話題が重なつた為では無い。ひとえに彼らの声が馬鹿煩かつたのだ。学生特有の「デカい声にキンキンと鳴る笑い声、それが隣で発生している、かなりの至近距離でだ。

人でごつた返しているホームはさながら大型同人誌即売会の壁サークルに並んでいる時を彷彿とさせる、自由な身動きはとれず周りに見えている人々とセットで行動しなければならない程だ。それ程の至近距離。とてもではないが自身の世界に閉じこもつていられるものではない。

さて、注意でもしようかと考えるほどであった。いやもうその言葉は喉の八合目を通つていた。

しかし時を同じくしてその二人に対し声が飛んだ。

「あの・・・、お声の方を抑えては頂けないでしようか？」

声は後方より聞こえた。見るとそこには一人の女性がいた。身長は一六十センチ中盤、ワンピースを着ているもその面積に余裕が見られる事から、少しあせている印象が見受けられる、しかしそれにしても茶髪のショートボブが似合う可愛らしい顔立ちの彼女であった。女性は続ける。

「あなた方の話すお声の音量が余りにも大きかつたもので・・・。

そう言うどちらりと後ろに目をやる彼女、そこには杖を突いた老婆が一人。見ると眉間にしわを寄せている。

「ああ、すみませ・・・ん？」

素直に謝辞を述べようとした二人組の片割れが途中で何かに気付いた。女性を凝視する男。

それと同時に「はつ」とした表情をし片手を抑える女性、左手の甲を隠すようにもう片方の手で包む、しかしそれでもそれは見えてしまっていた。

はツと鼻で笑いをかまし男は言う。

「お前、ジンブツかよ。」

「いえ・・・違います。」

「違うわきやないだろお、見えてんぞタトウーがよ！」

そう、隠された左手の甲から黒色の何かが顔を覗かせていた。

「計画的人口削減策」が施行されてからこの世界では「人間」と「ジンブツ」と言うカテゴリーで人類は分けられるようになつた、しかし一見しただけでは見分けがつかない為政府はジンブツに対し印を押すようになつた。それが件の「タトウー」、形状はバツ印である。

ジンブツには例外なく押されているそのタトウーは、付けられている箇所によつてそのジンブツの価値を表している。大まかに言えば着衣の状態で見えない箇所に押されている場合は安物、見える箇所であれば上物になる。このジンブツの場合は・・・

「しつかし手の甲にあるとは。くう、アンタの所有者が羨ましいぜ、上物は良い身体と面してるつてんだからなあ！」

「違・・・」

「んん？てか口が利ける上物つて相当レアじゃね？ちゃんと喘いでくれるんだろう？」

その辺にしておけと言う相方の忠告も聞かずに暴走する一男子学生、対象的に俯き消極的になつていくジンブツ。

すると「カツ、カツ」と何かを叩く音が聞こえた、音の方向を見ると発生源は老婆であつた。良くよく見てみると随分と豪華な出で立ちである彼女は杖を地面に叩きつけていた、

そしてチツと舌打ちをし「屑が」と一言、同時に杖を思いつきりジンブツの脛に叩きつけた。

「ツツ！イツ！・・・」

反射的な苦痛の声とそれを押し殺すとつさの反応。このやり取りだけでこの二人がどんな間柄なのかが分かる。

「大枚はいたのにその身体と顔は見かけ倒しかい!?男の一人二人も黙らすことが出来ないなんて！」

その間にも杖は振るわれ続ける。

「ツツ！申し訳ございま……せ、ンツ！」

老婆が言い終える頃にはジンブツの脛には無数の杖の跡が残つて いた。ぜえはあと息を切らす老婆、流石にゞ高齢の身体には応えたようだ。

息を整え暴走していた男子学生に目をやる老婆。男子学生は少し 高揚しているかの様であつた、ジンブツの痛がる姿を見て興奮でもしたのだろうか。それを感じ取つた老婆はニイつと不敵な笑みを浮かべ

「あんた、これに興味があるようだね。」と男子学生に語りかける。「はつ、はいつ！」突然の事で声が裏返る男子学生。

「煩い餓鬼だと思つていたけれども欲に対する実直さは評価できるねえ。」

「あ、ありがとうございます。」

「あんた、これ使つてみる？」

「え？」とは男子学生とジンブツの声。

「いやねえ、あたしは単純にあんたを評価してゐるんだよ。この場において興奮出来るその姿勢をねえ。感心してしまつた以上あたしの負けさ、だから褒美をやろうと思つてねえ。」

そう言いつつメモ帳に何かを書く老婆。

「あたしの連絡先だよ。それに飽きたら連絡よこしな、使いの者を 寄越すよ。」

紙切れを男子学生に渡し人ごみの中に一人消えていく老婆。取り 残されたジンブツと男子学生、場は空気の所有者を失い一時の沈黙を得る。

ほんの一時であつた、その後で場と彼女は所有者を再び得た。それを知らせるかのようにホームに響き渡る狂つた笑い声。

「本当に!?こんな上物ジンブツ貰えんのかよ!うつそだろ!」  
ジンブツの肩を力強く抱きながら輝かしい目をする男。

「ツツ……！」

痛がるジンブツ、それもそのはず極度の興奮からか男の爪はジンブツの肌に突き立てられ食い込んでいる。その表情は彼にとつては油

にしかならない。刹那、男はジンブツの腕を引き改札への道を向かつた。

「悪いアキラ、俺今日学校休むわー。」

そう片割れに声をかけながら。前屈みになりながら。

時間にして一〇分にも満たない一連のやり取りはこうして幕を閉じた。人々は先ほどまでの日常に戻っていく。携帯を見る者、友人と話をする者。取り立てて騒ぐ者はいない。男の片割れにしても「チツ、全く。」と呟いたかと思うと携帯を取り出し始めた。

ジンブツになってしまった以上それは物である、故に今のやり取りは物の譲渡が行われただけなのである。いわば今のは老婆が男にジヨークグッズを渡した、それだけのものなのである。それにしたつて倫理観はどうなっているのかと言いたくなるだろう。公共の場でそんなやり取りを、と。

仕方がないのだ、これが現代の世界なのだ。